

第6章 北方民族の住

藤原由貴

6.1 アイヌの住居

6.1.1 チセの概要

アイヌの人々は北海道の厳しい自然の中で、自然を神として敬い、自然の法則の中で生活を営んでいた。そうしたなかで自然の脅威から家族の生活を守り、育んでくれたのが、アイヌの人々の住居である「チセ」であった。チセの外観は寄棟造りで、住居の形式は掘っ建て柱、屋根や壁を茅や笹の葉で葺いた長方形の一間が基本である。大きさは家族構成や地方によって様々であったが、十勝では大きいもので長さ約9～11m、幅4～6m程度だったといわれている。海や川の近くで食糧や水を豊富に得ることができ、それに加え洪水や山津波、崖崩れなどの危険があまりない所に多く建てられた。集落（コタン）の規模は1戸から多くて10数戸であったと考えられている。

図 6-1 チセ



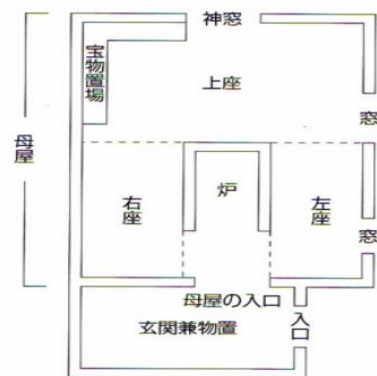
出所：旭川市都市建築部 HP

6.1.2 間取りと内装

チセの内部は長方形の一間で、ほぼ中央に炉がある。炉の上には肉や魚を干して燻製にするための炉棚が家の梁から吊り下げられており、その中央からは鍋を吊るすための炉鉤が下がっていた。

入口から炉に向かって左側をシソ（右座）といい、その家の主人が座っていた。上手が父親、下手が母親の場所であった。シソの向かい側の場所、炉に向かって右側はハリキソ（左座）といい、子供やそのほかの家族、客の座る場所であった。上座はロールソと呼ばれ、神が出入りするときに通る道と考えられていたため、普段はあまり立ち入らないように尊敬に値する人しか座ることが許されなかった。

図 6-2 チセの内部



出所：アイヌ文化振興・

研究推進機構 HP

窓は3ヶ所あり入口から入って正面に1ヶ所と右側（または左側）に1・2ヶ所ある。入口近くの窓はポンプヤル、奥の窓はイトムンプヤルといい、前者は炊事場用の窓として、後者は採光のための窓として利用されていた。特に正面の窓はロールンプヤルまたは

カムイブヤルと呼ばれ、神様が出入りする窓として大切に扱われていた。

左奥には宝物置き場があり、漆塗りの容器や刀などが飾られており、宝物の数はその家の豊かさの象徴であるといわれていた。

床は土間の上に枯草を敷きつめ、その上にカシやヨシで編んだ簾を敷き、さらにその上にガマやスゲで編んだ蓆を敷いただけのものであった。

6.1.3 作りの特徴

材料はすべて木や草などの自然物で、釘はまったく使用していない。材料を縛りつけるにはブドウヅル、コクワヅル、シナ皮製縄などが用いられていた。建物の基礎となる柱は長方形の四隅とその間に建てられ、家の内部には立てない。この柱は土台を置かない掘立て、地面に直接埋め立てられて固定される。材料は腐りにくいハシドイ、カシワ、カツラ、イヌエンジュなどが使用され、特に四隅の柱には太いものが使われていた。柱と柱の間には壁を葺く素材を縛りつけるための横木が何本か渡されており、長くまっすぐに伸びるヤチダモやナラのような木が使われていた。

チセには天井がなく、室内から屋根柱が見えていた。また、梁と梁との間には使っていない蓆やその材料であるガマやイグサが乗せてある場合もあった。

屋根は4方向に勾配のつく寄棟造りで、この屋根の構造がチセの大きな特徴の一つとなっている。この屋根を支える柱をケトゥンニといい、3本の木を三脚に組んだもので、上からの力を3方向に分散する役割を持ち、屋根を支えるためにはとても合理的な構造をしていた。

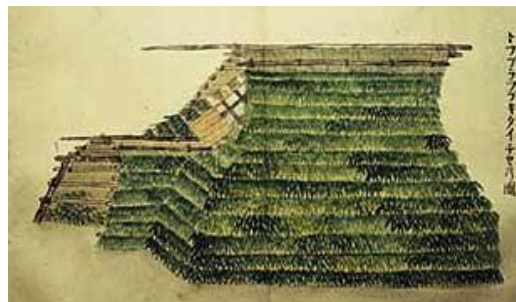
屋根や壁を葺く材料は茅・ヨシ・笹・樹皮などで地域によって異なっていた。茅を用いたチセは、胆振地方や日高地方をはじめとして北海道内で一番多くみられる。笹を用いたチセは、主に上川地方で、白樺などの樹皮を用いたチセは、北見や根室地方を中心にみられる。いずれもその地域において、最も手に入りやすい材料が使われていた。このような草壁で寒くなかったのかとを感じるが、実際には壁がカヤの太い束で出来ているため断熱効果があり、炉に火がある限り家の中は冬でもそれほど寒くならなかったと言われている。

図 6-3 樹皮を用いたチセ



出所：アイヌ文化振興・研究推進機構 HP

図 6-4 笹を用いたチセ



出所：アイヌ文化振興・研究推進機構 HP

6.1.4 付属建築

アイヌの人々の生活の中心であるチセの周りには生活や信仰に関わる付属施設がいくつか建っていた。以下簡単に説明する。

- ・子熊飼養檻（ヘペレセッ）

ヘペレセッは春の猟で生け捕りにし、冬に行われるクマ送り（イオマンテ）と呼ばれる儀式で天界に送るための子熊（ヘペレ）を飼うためのもので、丸太を井桁組にした構造である。小熊は神様からの預かりもので養育を託されたと考えられ、大切に育てられた。

図 6-5 ヘペレセッとプー



出所：白老町アイヌ民族博物館 HP

- ・食糧庫（プー）

高床式倉庫であるプーには、長い冬の生活のために穀物や干し肉、干し魚が常に一家族の2〜3年分蓄えられていた。ネズミなどの害獣の侵入を防ぐため、柱にはネズミ返しをつけ、普段出入りするときははしごを使っていた。

- ・トイレ（アシンル・メノコル）

一つだけ作り、男女兼用という地域が多かったようだが、男女別に二種類作り名称も男性用をアシンル、女性用をメノコルと呼んで区別していたところもあった。地面に穴を掘り、そこに片流れ型か円錐型の小屋を建てたもので、穴がいっぱいになると近くの別の場所へ移していた。かつてはトイレットペーパーのようなものはなく、植物の葉を乾燥させたものを使っていた。

6.1.5 チセでの暮らし

チセはアイヌの人々にとって生活の中心であり、安息の場所であった。家族は家の中心にある炉を囲んで仕事をし、さまざまな儀式を行い、一家団欒の時を過ごした。

家族構成は親子二世代あるいは親子孫の三世代同居だが、子どもたちが成長するにしたがって家が狭くなると、長男から順に別に家を建てて独立したり、祖父母が家のすぐ近くに小さな別棟を建てて住んでいた。

家族はこのチセの中で、現代の社会と同じように家庭生活を営む上で必要な仕事をそれぞれ役割分担しながら日々を過ごしていた。男性は猟具の手入れやイナウ・イクパスイなどの信仰用具を作り、女性は着物・蘆作りや食事の支度、子どもたちは水汲みや子守など親の仕事の手伝いをしていた。

6.2 イヌイト（エスキモー）の住居

6.2.1 イグルーの概要

北極圏のイヌイト（エスキモー）が冬季に住む雪でできた家をイグルーという。イヌイトはアザラシなどを求めて狩をする遊牧民族である。夏季にはテントで暮らす、寒さが厳しくなると雪を利用して家を作る。雪（氷）の家をさす場合が多いが、流木その他の材料で作られた家もイグルーと呼ぶ。主にカナダ北東部やグリーンランド、アラスカ北部で見られた。

イグルーは雪を固めたブロックを積み上げて作られており、ドーム状の形をしている。規模にもよるが雪のブロック 4～7 段くらいで頂上になる。内側にはアザラシの毛皮が張られており、雪との間の空気層が断熱や保温の役割を果たす。外の寒気や風を遮断するため内部は意外に暖かい。暖房はアザラシや鯨の油を燃料とするオイルランプがひとつあるだけであるが、室内が丸いため上昇した熱が壁にそって下へ降りて、ほどよく暖まる。

また、北方民族博物館ではイヌイトの竪穴住居を再現したものが展示されている。家は流木やクジラの骨で組み立てられ、泥炭や芝生を積み上げて断熱効果を得ている。

図 6-6 イグルー



出所：原住民の生ける知恵
「カナダのイヌイット」HP

図 6-7 イヌイトの竪穴住居



片原顕光撮影

6.2.2 作り方

①圧雪した雪面から雪をレンガ状にのこぎりで切り出す。

イグルーの土台部分はある程度大きく切る。上に行くに従って、ブロックは徐々に小さくする。

②きれいな円を描き、その円の淵に沿ってブロックを並べる。

円は直径1～1.3mほど。土台の雪のブロックの高さがばらばらだと積み上げるのが不安定になるので、同じ段のブロックは出来るだけ同じ段になるようにする。ブロックは徐々に前にずらし、更にブロックとブロックのつなぎ目の上に新たなブロックを置く。そうすることによってバランスが取れやすくなり、最後に入り口をあける際も、崩れることが少なくなる。但しあまり前に出しすぎると不安定になるので、状態を確認しながら作業を進める。

③入口を作る。

上までブロックが完全に積まれたところで、ブロックとブロックの隙間を埋め、入り口をのこぎりで切り、入り口の周りにブロックを積んで完成させる。

6.3 コリヤークの住居

6.3.1 コリヤークの概要

コリヤークとは、カムチャツカ半島の付け根および隣接するシベリア、一部ナバリン岬にすむコリヤーク語を話す人々のことである。コリヤークには大きく二つの集団に分けて考えられてきた。一つは内陸のツンドラ地域でトナカイ飼畜民を生活基盤とするトナカイ・コリヤークであり、もう一つは海岸地帯に定住し、アザラシ類をはじめとする海獣狩猟やサケ・マス類の漁撈などを主な生活基盤とする海岸コリヤークである。人口は 1900 年頃の統計でトナカイ・コリヤークが 3748 人であり、海岸コリヤークが 3782 人、合計 7530 人とされている。

6.3.2 トナカイ・コリヤークの住居

トナカイ・コリヤークは、移動式住居「ジャジャーガ」を持っていた。ジャジャーガは基部が円筒型、上部が円錐型で、毛が生えている面を外側にしたトナカイの毛皮で木製の骨組みを覆ったものである。住居の覆いとして用いられる毛皮は、余分な肉や脂が除去され、防水のため揉まれ、燻煙されるなどの加工が施されたものである。

図 6-8 ジャジャーガ



出所：小樽商科大学附属図書館 HP

夏の住居の覆いにもトナカイ皮が使われていたが、こちらは毛が除去された革、あるいは使い古して磨耗したものが利用されていた。住居の内部には、いくつかの帳が取り付けられていたが、この帳もトナカイ毛皮製で、各帳ではそれぞれ別の家族が生活していた。テントは通常親戚関係にある 2、3 家族の共同利用が一般的であった。

6.3.3 海岸コリヤークの住居

カムチャツカ半島北部に住む海岸コリヤークの住居は、木材を組み合わせた八角形の半地下式の堅穴式住居である。住居の中央には炉があり、天井には窓を兼ねた煙抜きが開けられている。この開口部は丸太はしごをかけて冬の出入り口としても使用される。その煙抜きのほかに、海に面した側に第二の出入り口が設けられている。この出入り口は漁撈を行う夏の間だけ開放され冬にここから出入りすることは禁忌だった。堅穴式住居はトナカイ

イ・コリヤークと同様に 2、3 家族が共同で利用し、壁の 3 方にしつらえたベンチが各家族のスペースとなっていた。夏にも竪穴式住居を利用する地域があったが、多くの地域では長い支柱の上に建てた木造住居を夏の家として利用していた。

6.4 環境と調和した暮らし

6.4.1 移動手段

水辺の環境では移動や物資の運搬のために船が重要な移動手段となる。アイヌの場合は丸木船、あるいは丸木船の横に板を張った、海で使うイタオマチブなどがある。北方地域の森林地帯林では白樺の皮を使った船がある。さらに北の方に行くと、アザラシやセイウチなどの動物の皮を張ったカヤックが使用される。これらの違いは船を使用した北方民族が暮らす自然環境の違いによるものである。

積雪期の移動には橇が使われた。古くは人がひいていた橇だが、やがてイヌや飼いならされたトナカイを利用して引くようになった。トナカイ橇は雪上だけでなく、湿地状のツンドラなどでも使用された。

6.4.2 雪上歩行具

北米の雪上歩行具としてよく使用されるのは、網目状のテニスのラケットのような「かんじき」である。ユーラシア側はスキーが発達しており、板の裏には毛皮、多くはアザラシの皮、あるいはトナカイなどシカ類の脛の毛皮が張られる。毛の向きにより前には進むが、上り坂を上る際には毛が滑り止めの役を果たす。

北海道のアイヌでは本州と同じような、いわゆる輪かんじきという木を曲げて輪のような形にした小さめのかんじきを使用するが、サハリンのアイヌはスキーを使用した。

図 6-9 雪上歩行具



出所：北方民族博物館 HP

参考文献

- ・アイヌ民族博物館監修, 1993, 『アイヌ文化の基礎知識』 草風館.
- ・北海道立北方民族博物館, 2006, 『環北太平洋の文化 I コリヤーク』.

参照 HP

- ・旭川市都市建築部 公共建築課 HP

<http://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/files/koukyokenchiku/arakaruto1/kotan/ainukotai.htm>

・アイヌ文化振興・研究推進機構 HP

<http://www.frpac.or.jp/together/details/post-2.html>

・白老町アイヌ民族博物館 HP

<http://www.ainu-museum.or.jp/>

・原住民の生ける知恵「カナダのイヌイト」 HP

<http://theropithecus.net/>

・親子の住まい方教室

<http://www.sumai-info.jp/oyako/06/03-3.html>

・分かりやすい「イグルー」の作り方

wica.jp/text/igloo_tukurikata.pdf

・北方民族博物館公式 HP

http://hoppohm.org/tenji/jyoten_j2.htm